

## あ の 頃 の こ と

小 宮 利 彦\*

新潟応用地質研究会が、発足30周年を迎えられるとか。幅広い分野の人々の集りである“研究会”が、これ程活発にながいが活動を続けている例は、あまり多くはないとききます。月並ながら御同慶と申しあげましょう。

もう30年になるのかと、小生にとっても地質調査業界に身をおくことになって間もない時期のこととて、“地質”はもとより、とり敢ずの土質についても暗中模索の頃のこと、これまた月並ながら感慨入の憶いであります。

今よりは多少若く、したがって元気でもありましたので、狭いおつきあいのなかで、生意気にも“実用的な地質学”を目指す集りと、県の出先の方々や国関係の主として土木畑の方々へ会員募集のPRにつとめた記憶があります。未だ新大工学部で土木科の卒業生の出ていなかった時期ではなかったでしょうか。

ところでここに小生にとってまことに頭の痛い事態が生じました。当時、民間会社の会員が数少なく、ご熱心に幹事長をつとめておられた津田前学長からせめられて止むなく、例会後の時間を埋めなければいけないハメとなったのです。困却の果、調査の一例として北陸地建新潟国道工事々務所で御発註の国道7号線勝木～鼠ヶ関間の調査を報告することに致しました。いかに小生とて今なら常識のうちなのでしょうが、当時は、概査のサウンディングを進めているうちに、県境の山地丘陵が海岸まで迫っている地域にも一部ひらけた平坦部では腐植物混りの軟弱広の存在にあって、いささか驚きでありました。したがってその後、土質試験から盛土の安定解析へと当初予定もしなかった大がかりな調査へと進んだ経過を、たどたどしくも未熟なおしゃべりで辿ってみることで何とか時間をつぶさせて頂いたのですが、旧教育学部校舎の階段教室、かなり肌寒い時節であったにも拘らず、汗をかいていたことが思いだされます。それにしても現今ならコンピュータ処理でなんと云うこともない円弧すべり計算ですが、これを手回しの計算機で取組むのは、相当な根気仕事でありましたネ。

もう一つ。新潟地震以前は間違いないのですが、時の記憶はあやふやとなってしまいました。分科会で新潟市を中心に平野部の土質柱状図をあつめ、地盤図をとの企画がありました。あるいは今も卓抜なアイデアマンである中山会員のご発案だったでしょうか？須田、中山、米沢の各会員などなど、錚々たる気鋭のメンバーに加えて頂き、勤めが終って6時頃寄居ヶ丘に建つ旧理・人文学部校舎の、あまり明るいと云えない電灯の下で作業をするのですが、ふと気がついてみるとその部屋、その当時を更に遡ること16～17年、旧制新潟高校理科1年1組の教室でありました。essen- alz- qeqessen (なんと切実な言葉であったことか)、sein- war- qewessen と一生懸命に暗誦していた往時が想い出されました。不遜にもその頃(多少の理由はあるのですが)“地学”は unsinn ときめつけ、一課目落第さえなければと、ダイヘンと借用ノートで済ませて、授業で興味のあったのは、ソクラテスと古代史と源氏と云うヘンな理科生が、多少とも“地質”に拘わる稼業になろうとの想いは、今もほろ苦く残ります。

分科会はそれぞれ有能な社会人である会員諸兄が6～7月と多忙になられたためか、あるいは地震でそれ

\* (株)新協地質技術顧問、元幹事

どころでなくなったためか、今となっては判然としないのですが、立ち消えてしまったのは残念なことでありました。

いまとなっては地盤調査と云う仕事、異人池に代表される砂丘末端に連なる軟弱部の存在や、他門川沿いに並ぶ雪町、月町、花町と云った華やかな地名や、つい先頃まで稲刈り後の満々と水を湛えた水田に向うに、一直線につながる集落やは、新潟で生れ育ち、この地でその生を終えるであろう小生にとって、郷土史的な興味もあったのかとも思うこの頃なのですが……。

あれから30年、新潟応用地質研究会、その光栄の歩みにも拘わらず、会員としての小生の拘わりは、この駄文を含めてその人生そのもののように、まことにお恥しいかぎりなのですが、初代会長でいらしゃった故西田先生とは、ご縁あってその後親しくご交際を頂いたことを始め、会あって多様な畏友の知己を得ることができました。研究会の表にはでない大きな功績かと、深く感謝いたしております。

会と会員皆様のますますの御発展を……。